
エクスリッター

ルート・西

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

エクスリッター

【Nコード】

N2146W

【作者名】

ルート・西

【あらすじ】

異世界を繋ぐ扉「ストームゲート」

異世界からの破壊のモノ 「魔騎士」 《ヘルリッター》

異世界からもたらされた力 巨大なる鋼鉄の守護者 「超騎士」 《

エクスリッター》

エクスリッター

超騎士に選ばれし少女 「乙女」 《ヴァルキリー》

ヘルリッター
魔騎士の我々の現世界への進行を食い止める組織 超騎士団「エ
クスカリバー」

かつて戦いがあった。

それは世界の存亡に関わる戦い。

その戦いに立ち向かったのは四人の少女達 ヴァルキリー エクスリッター
乙女と超騎士

壮絶なる戦いは多くの犠牲を払い。

決して勝利とは言えない結末を迎える。

そして、少女を大人へと変える年月が流れ。

ヴァルキリー
新たな乙女に選ばれた少女達の戦いが始まる。

ブローグの敗北

????――

「ダメです！」「スチームゲート」維持できません！！」

オペレータの叫びが司令室全体に響き渡る。その場にいる全員の顔に絶望の色が広がる。

「……限界時間は？」

司令室中央に浮かぶ球状の巨大水晶クリスタルモニタに映る。上も下もわからない青白い世界を睨みながら団長はオペレータに「スチームゲート」の限界時間を述べさせる。

「もう十分も、このままではゲート内の「ソードタイガー」「レイピアウルフ」共にこちらには戻って来れません！」

もはや、一刻の猶予も無い。団長は奥歯を噛み締め全員に告げた。

「我々の、完敗だ。速やかに「スチームゲート」からの撤退と現世界との断絶作業に掛かれ、「ソード」「レイピア」両「超騎士」《エクスリッター》の撤退ラインまでの後退指示を――」

『待つてください団長！』

だがその時、巨大水晶から声が響く。水晶に映る青白い世界に浮かび、その手に握る剣を振るい続ける銀色の虎頭を模した巨人騎士「

ソードタイガー」からの通信だった。「ソードタイガー」と重なり銀色のドレスの少女が映し出される。

『撤退は了承できません！ そんなことをすれば奴らを、「魔騎士」《ヘルリッター》達を我々の現世界に入り込ませる隙を——グッ！？ 作らせてしまう！』

「だが、このままではお前達はこちらに帰ることが、我々はお前達を失うわけには——」

『どのみち私は戻れない。この距離じゃ、時間内には戻れません。だから私が——！？ 食い止めます！ その間に「レイピアウルフ」を撤退させてください——！』

剣を振る「魔騎士」の軍勢を退ける「ソードタイガー」そこから遠く離れた空間で支援防御陣を組み続けていた桃色の狼頭の巨人騎士「レイピアウルフ」から映し出される淡い桃色のドレスの少女が悲鳴に近い声を挙げて、持ち場から離れ、「ソードタイガー」へと向かおうとする。

『なに、なに言ってるの！ あたしだけ撤退なんて、やだ、あたしも！？』 『黙りなさい！ あなたはここに止まる必要は無い！ 戻りなさい。ここから去りなさい。あなたは次に、繋げるの——！』

『やだ、嫌だ。そんなのいやだ——！ あたし。キョーコまでいなくなるらないでよ——！』

『勘違いしないで、帰ってくる。私は必ず帰ってくるから、文はあつちで待ってて』

『けど、けど。クレアも由梨香もそういつて帰ってこなかったじゃ

ない!?!」

『信じて! 文、私を——グッ、ウウアッ!?!』

『キョーコオオッ!?!』

『早く、団長! 早く!?!』

「くつつ。「レイピア」に強制魔力! レイピアの「魔心」《マジモータ》を自動に。^{オート}撤退を理解させる!?!」

怒声のぶつかりはキョーコの願いを聞き遂げる形で終わりを告げる。

『そ、んな……なん、で』

注入される強制魔力により文の意識は急速に遠ざかる。ぼやけ始める視界「ソードタイガー」へと伸ばす片手が空を切り

『いや、やあつ……キョーコ、キョ、コ』

そのまま意識を失い「同体の間」《マスターコックピット》に身体が浮かび「レイピアウルフ」は悲しげな唸りを挙げ、後退を始めた。

『っ——ありがとうございます団長』

魔騎士の繰り出す一撃を受け止めながらキョーコは団長へと礼を述べる。

「すまん……キョーコ」

震える手で顔を覆い、団長は頭を下げる。これから取り残してしまう少女へと、謝罪の言葉を口にする。

『名前を、呼んでくれましたね』

だが、キョーコは優しい微笑みを涼やかな年頃の少女らしい声を彼へと向ける。

「キョーコ……」

『もう、十分だよ』

キョーコのその声に覆った手を外し、彼女の笑顔を取りこぼさないように水晶を見つめ続け、無理やりにも、らしくなくても、笑顔を作った。

そんな団長にキョーコは満足な表情を浮かべる。

「「レイピアウルフ」撤退ラインに到達!？」

オペレータからの報告。それは、同時にキョーコとの別れの意味する報告。

もう時間は残されていなかった。キョーコはその表情を凜とした力強い戦士の物へと変え、瞳で訴えた。

やってくれと。

団長はその凜とした戦士の表情を見続けながら、力強く。司令としての非情な命令を告げた。

「「レイピア」撤退！ 「ストームゲート」の現世界への道を断て
！！」

『ごめんね……最後まで怒鳴ってばかり……文』

キョーコの友への言葉を最後に巨大水晶から映像が消失する。
クリスタルモニター

最後に発したその言葉は銀色の少女から桃色の少女に向けた。初めての謝罪の言葉。妹のような親友に向けた最後の、言葉だった。

そして——時は止まること無く未来を刻んだ。

新たな未来を、刻んだのだ。

響く「日常」

ちゅうおうじがいていとうきやうちく
中央市街東丘地区――

夕刻 東丘高校通学路――

「あ、あの、お願いですから通してください」

夕暮れの通学路。気の弱そうな少女が今にも泣き出しそうな顔でしっこく絡み、目の前を通せんぼする軽薄そうな男達に頭を下げて懇願していた。

「だから、君がはいと言ったら通してあげるっていつてんじやない？」

だが、男達は薄ら笑いを浮かべて、彼女に絡み始めてからずっと同じような言葉をはいて通してはくれない。男達は彼女からの「はい」という言葉を待っていた。

「そんな、わたし、そんなの無理だつて言ってるのに……」

少女は両手で抱えた鞆をグツと抱き締めて俯いた。彼女は「はい」とは言えない。男達の望むことは受け入れられなかった。

「どうして？ ちょっと俺達と遊びにいくだけじゃない」

「そそ、ちょっと深夜までね」

「ほら人生遊ばないと。きみ結構可愛いし、そのエロいセーラー服も有効活用しないともったいない〜」

「俺達、わりかし紳士だからやさしくするし、たぶん」

「ぎやははは！」

怖い。少女は怖くてたまらず脅えていた。こんな男達に着いて行けば、なにをされるかわからないだろう。だが、男達はいつこうに通してくれないし、運の悪いことに遅れて学校を出たためか誰も通にかかる人もいない。いや、もしかしたら通りかかるのかも知らないが、この光景を見て関わるまいと踵を返して遠回りをしているのかも知れない。

このままでは男達は痺れを切らし誰もいないのをいいことに彼女を。

（誰か、誰か……助けて）

少女は微かな希望で願った。誰かが自分を助けてくれるのを、少女は願った。

「あゝあ、しぶいといなあ。おい、車すぐそこだよな？」

「おお、なに、もしかしてラチる？」

「正解。ダッシュでいきや連れ込めるでしょ？」

「ウハ！ ひどいねえ、忘れられない思い出作らせるってこと！」

だが、無情にも男達はとても残酷な決定をし、少女の手を引っ張っ

た。

「いつ、やつ!？」

抵抗をしようとした。だが、男達の手は華奢な少女の手より何倍も強く、グイグイと少女は引っ張られていく。絶望の二文字が浮かび、少女は目の前が真っ暗になっていた。

「おい」

たがその時、凜とした声が少女と男達の耳に響いた。

「ああゝん」

めんどくさげな顔で男達は声の方向を見た。

「なにしてる」

そこには女が立っていた。男達がエロいといったものと全く同じ緋色のセーラー服を着た女生徒が肩に鞆を架けて、真っ直ぐに男達を睨んでいた。

「ひゅゝ、こつちもなかなか」

男のひとりが下品な笑みでへたくそな口笛を吹き、ジロジロと品定めをするように眺める。

すらりとした長身。少し大きめな猫のような切れ長の眼。やや日に焼けた健康的な肌に凜とした整った顔立ち。後ろでまとめた黒髪。ポニーテールも相まってとても魅力的な女に見えた。

ゴクリと男達の喉がなり、上玉と言える女の登場に途端に捕まえている女がガキっぽく見えた。ひとりが舌打ちをし、ヘラヘラとした笑いを漏らしながら目の前の少女へと言葉を投げる。

「はは、なに？ キミも遊んで欲しいわけ？」

その声を聞いた瞬間、猫のような眼がつり上がり、彼女はよく通る声を男達へとぶつけた。

「うるせえっ！ 誰がためえらみてえなバカと遊ぶか！！」

そこから発せられた言葉はとても女とは思えぬものだった。

男達は一瞬啞然となり、ポカンと彼女を見つめた。

「おい、アホ面並べてないでうちの生徒の手、放せ」

刺すような眼で、同じ高校の女子の手を掴む男を見る。

ポカンとしていた男は彼女の自分達をバカにした言葉に沸々と怒りが沸き、捕まえた少女を放り出し、仲間と共に、慥然とした女に取り囲むようにして近づき、吐き捨てるような言葉を次々とぶつけた。

「おうこら、なめた口をきいてくれんじゃねえか」

「ちつと女らしい言葉使い覚えたほうがいいね」

「お、もう一度同じ言葉いってみるよおい！」

「てめ色々と台無しすぎなんだよ。ブッコロスぞおら！！」

女生徒ひとりを取り囲み、沸点の低すぎる男達は凄みを聞かせて上から下から睨み付ける。完全に体裁など忘れたまともな社会人とは思えぬチンピラな行動。並の女の子ならこれだけで脅えてしまうだろう。

だが

「もう一度言ってやる」

彼女は並の女の子ではなかった。

「ウルッセエエエィ!!」

「ゴオッッ!？」

鞆を放り投げると、勢いを付けた強烈な肘打ちを男のひとりの鳩尾にめり込ませた。男は前へと倒れ

「後ろで寝てろっ!」

込む前に少女のヤクザのような蹴り込みで後ろへと倒れ、口からヨダレのようなものを垂らしてまるで眠るように気を失った。

「えっ!」

一瞬で起こった仲間の惨状に男達は固まった。
なんだこれ。なにが起きた。

「おい、そいつ担いでとっと消えろ」

首をコキリと鳴らし、男達を睨み付ける。

ありえない事が起こった恐怖心か、それとも男としてのプライドか。目の前の少女に対して男達の中でなにかが弾けた。

「や、やつちまえ!？」

「うあああっ!？」

完全に声の裏返った安いチンピラなセリフと叫びと共に男達は少女へと飛び掛かった。

「たくつ、メンドクセエなあっ!！」

少女は顔の前に拳を構えるファイティングポーズを取り、勇ましく男達を迎え撃った。

「ち、ちくひょう。うおぼえてろ」

呂律の回りきつていない安すぎる三下ゼリフと共に気絶した仲間を引きずり、ボロボロな男達は情けない格好で去っていた。

「覚える気にもなんねえよ」

もはやどんな格好か何人いたかも記憶の外に叩き出した少女はめんどくさげにスカートのほこりをはたき、放り出した鞆を肩に担いで助けた少女へと顔を向ける。

「最近はおあいいうバカがたまにいるからさ。真っ直ぐ家に帰った方がいいぜ」

「あ、は、はい」

どこか惚けた表情で彼女を見つめていた少女はハッと気付いてこくりと頷いた。

「んじゃ、気をつけてな」

シュツと片手を挙げて彼女は格好良く去ろうとする。

少女は慌てて声を掛けた。

「あ、ありがとうございます！ あ、あ、あ」

声を掛けて礼を言ったのはいいがそのあとの言葉がなかなかでない、なにか喉に詰まったように声が出ない。

「ん？」

彼女は顔を少女に向けて待つてくれている。特にめんどうだという顔もしないで待つてくれている。少女は喉につつかえたものを吐き出すように言いたかった言葉を取り出した。

「あ、あ、あ！ お名前は！」

「はい？」

一瞬なにを言われたか彼女はポカンとし、少女は何を言ってるんだ

と慌てて言葉を取り消そうとした。だが、彼女はニツと笑って応えてくれた。

「あたしは「覇堂 響」《はどう ひびき》ってんだ」

その笑みに少女はドキリと胸の高まりを覚えていた。大人っぽいと顔立ちの彼女の隠れていた八重歯をむき出しにした笑顔は子供のようで、なにかずっと魅力的な少年のような錯覚を覚えた。

そして、少女は彼女の名前を聞いてハツとする。それは、友達から聞いた一年生の間の噂の名前。

「二年に凄くカッコイイ女子の先輩がいる」と。

「んじゃな」

そして、彼女、覇堂 響は男前に親指を立てて少女の前から去っていた。

「はどう、ひびき先輩」

少女はグッと鞆を胸に引き寄せて、響の後ろ姿をどこか恋い焦がれる女の子のような表情で見えなくなるまで見つめていた。

「ういす。おまたせ」

「はいはい、お勤めご苦労さまさまです」

人助けを終え路地を曲がった所で響は手を挙げる。その先には彼

女より少し小柄な同じセーラー服姿のメガネ女子が同じく手を挙げて歩いてくると並び同じように歩き始める。

「あゝ、無駄に動いてはらへった。」「千世」《ちせ》なんか持つてね？」

「へいへい、「フルーツマト」でよければ」

千世と呼ばれたメガネ女子はそれが当たり前のようにポケットからスティック系の大豆健康食品を取り出す。

「さんきゅ、はゝ、うんめえなあゝ」

健康食品を受けとると早速かぶり付き響は幸せそうな笑顔をほころばせる。

「ふう、しっかし今日は端で見ててヒヤツとしたよ。人数多いんだもん」

千世は路地から見てた光景を思い出し、少しため息まじりに隣の響を見上げる。

「そつか？ なんでもねえよあんなの」

だが当の本人はケロッツとしてまるで簡単な準備運動をこなしてきたような調子で言いながら二口で食べた大豆健康食品の袋を振るい手のひらに僅かなカスを落としていた。

「ま、実際なんでもないってのがビツキーの凄い所よね」

手のひらのカスを食す意外とスーパーな友人を眺め、千世はニヤリと笑う。

響は「ん？　なんかついてんのか？」と、自分の顔を拭う。それを見て千世はまた笑う。

「なんだよ千世。なに笑ってんだ？」

少し不満げにジト目で睨むのだが、千世はいつもどおりな子供みたいな睨みなんて全く怖くなかった。むしろますます笑みがこぼれるのだ。

「いやいや、女の敵に見事なパンモロサービスを繰り出すビッキーを思い出しまして、ついつい笑顔が」

ごまかしのつもりでそう言うと、響は「そのなにがおもしろいんだよ」と首を傾げる。

「だいたい、あたしのパンツなんて見てもサービスでもなんでも無いだろ？」

「あのさ、ビッキー自分が美人だって自覚無いの？」

ちよつと呆れ気味に何度めか解らない質問をしてみる。

「またそれかよ。何度も言ってるだろ。あたしが美人ならこの世の女の半数は美人だって」

そう、響は自分が美人だとは思っていない。何度も鏡で見ている自分の顔が美形だとは微塵も思っていない。

「はあ、ほんとに罪作りな女だよきみは。またひとりファンを増

やしたというのに」

やれやれなジェスチャーで千世は首を振るが、響にはなにがなにやらわからない。

「あたしにファンって、なんの冗談だ？」

もはやここ一年で趣味の領域に入った東丘校生の人助けで何人のファンが生まれきたかを彼女は知らない。

（ま、ここもビッキーの魅力と言えるのかね〜）

うゝんと難しい顔でこのド天然な友人を千世は眺めるのだった。

「うっし！ 明日の休みはなにすっかな！」

もはや、彼女の頭の中は明日の日曜日の事でいっぱいになっていた。

「あ、そう言えば明後日の小テストは大丈夫？ ちゃんと勉強した？」

「へ？ なにそれ？」

唐突なテストという言葉に響は眼を丸くして、その場に固まってしまった。

「そんなのいつ言ったんだ？」

「はあ、一週間前にキダツチ先生が宣言したでしょ？」

「ウソだろ！？」

いま始めて知ったとばかりに驚愕する響に千世は「またか」とため息をついた。

「いやいやそんな絶望的な顔しなくても、漢字の小テストなんだから明日の休みにみっちり書き取りでもやれば――」

さりげなく絶望からの脱出案を提示するのだが

「休みの日に勉強なんていやだ！」

あつという間に一蹴するのだった。

「よし、仕方ない。明日の放課後は潰す。こいや再テスト！ウハハハ！！」

と、開き直る友人をちよつとだけ生暖かい眼で千世。

「ほんと、興味ない事には絶対に努力しないよねビッキ―」

意外とスーパーな響も、勉強という努力とは向き合えなかった…
…そんな彼女のために千世はある秘策を用意していた。

「千世のやつ本気であたしがこんなんやると思ってたのか？」

帰宅後。受け取った秘策をポカンと眺めていた。

その目線の先にあるのは分厚いノートだった。 無駄に達筆な筆
ペンでこう書いてある。

〜〜ビッキー専用最強必勝漢字ノート！！〜〜

別れ際に渡されたため、恐らくはじめから用意していたのだろう。
友人の優秀な先読みに響はなんだか涙が出てきた。

「うゝあ」

試しにパラパラとめくって目眩がしてきた。目に飛び込んでくる漢
字、漢字、漢字。ひとつひとつに書き取りスペースが三列もあり、
更におまけの〜〜ビッキー書き取り予備〜なるノートまである。

「無理だ！ 漢字に殺される！！」

身震いしてなにか重く感じるノートを置く。こんなのに貴重な日曜
を潰されるなんて、勉強や頭を使った努力が苦手な響には耐えられ
無かった。

開き直ってやらずに持って行ってしまおうか？ 幸いといって
いのか監視役の千世は急遽用事ができて来れないようだし。通学の

利便で両親とは離れた気ままな一人暮らしな響には（たまに母親が掃除にやってくるか）とやかく言う人間が明日はいないのだ。やるもやらないも本人次第。そう、響の決断次第なのだ。

「あゝ、でもなあ」

ノートの達筆な筆ペン文字を見る。千世はこれを用意するために自分の時間を割いてくれた事を響は考える。

重いノートを持って捲る。よくよく見るとひとつひとつ手書きだった。千世なりに自分を心配しているのかも知れない。帰りがけの千世の言葉を思い出す。

——大丈夫。身体で覚えれば自然に覚えられる！

グツと親指を立てる千世の姿が思い出される。

身体で覚える。書き取りを頑張ればちゃんと努力の結果が表れるという事だろう。

「うゝん、ゆっくりとでもやってみっかな」

ゴロンと床に寝転がりノートを眺め、自分なりにやってみようと決めた

その時

「おっ！ つえっ！」

手が滑り、重いノートが胸の真ん中を直撃した。

「いつ、てえ……」

一瞬の息が出来ない痛みに、やはり自分は勉強に向いて無いのではとあつという間に響は怠けたい気持ちさがせりあがってきた。

「うえ、変なアザになってる」

ヒリヒリとする痛みに服を引っ張り胸を見ると、なにか変なアザができて響はげんなりとしてため息をついた。

「ま、明日やることにしよう」

なにか疲れた顔でのっそりと立ち上がるとそのままベッドにダイブして、寝息を起てた。

???—

マジモータ
「魔心「ヴァルキリー」反応」

「ファイル空間魔力固定。ポイントE〇〇〇五。仮「処印」オートスタンプ」

だだっ広い近未来的な「ルーム」の中で、世話もなく動く人々。機械の前で鈍く明滅する科学的な光。中央に浮かぶ巨大水晶から映し出される「紅い」鬘のような巨大な頭部と淡く輝く魔法のような光。

機械の前に座る数人の黒い軍服のような服を着た作業員のひとりがルームの奥に座る人物に報告をする。

「「ブレイド」確定。決まりです」

「……そうですか」

その人物が閉じていた眼をゆっくりと開く。黒い真珠のような眼が、巨大水晶へと向けられる。

「「二十六年」越しの「乙女」《ヴァルキリー》」

他の人間よりも特別なデザインの黒い軍服の人物はそう呟いた。

「！？ これは！」

作業員のひとりが驚愕の表情をすると同時に巨大水晶の映像が反転し、真っ赤な警告の文字が映し出されルーム全体に緊張がはしる。

作業員が報告をする。

「「スチームゲート」に微かな反応あり、反応コード「ヘル」！！」

「「こちらへの、到達時間は？」」

「明日、正午〇〇ー〇と予想」

「二十六年のブランク……恐らく予想どおりにはいかないでしょう」

「団長。ご決断を」

緊張感に包まれるルームの中で、団長と呼ばれた人物は立ち上がり、胸を張って、薄く「ルージュ」を引いた唇を震わせて声を張って全体に命令を下す。

「「仮想世界」《レプリル》「魔甲弾」《シューター》最終チェック。多少強引にでもブレイド「乙女」《ヴァルキリー》の確保を」

「これより、超騎士団「エクスカリバー」新生の時です!!」

高らかに力強い凜とした宣言と共に団員達は敬礼を返し、それぞれ動き出した。

響「覚醒」

中央市街 東丘駅前――

午前八時四十五分

（なんだろうな、これ）

響は胸を押さえながら駅へと急いでいた。行き先は病院。昨日の夜にノートでぶつけた胸のアザがおかしなことになっていたからだ。

朝、響は胸に違和感を感じて眼が覚めた。チリチリとした夏場の日に焼いたような熱が胸にある。

服を脱いで確かめると、響は「なんだこりや」と思わず叫んでいた。アザが大きくなっていた。いや、昨日見たときとは別の形に、まるで太陽のようにもライオンの鬣のようにも見える不可思議な形になっていた。

そして、それは響がまだ寝ぼけているのか。ぼんやりと光っているように見えた。まるでパチパチと燃える火の粉のようにも見えた。

「中央の病院なら」

とても勉強どころでは無いと思った。

なにか安心が欲しくて響は病院へと急いだ。運が悪く近場の病院は休みとなっていた。だから確実に開いているだろう。中央の総合病院へと急いだ。電車で降りれば五分程の距離、今から行けば午前中には見てもらえるだろう。勉強は午後、もしくは千世には理由を

話して許してもらおう。

そんな思いで駅前へと到着し、切符を買ったための小銭を取り出しながら駅へと向かう。

「ちよつとすいません」

なにやら声を掛けられた。響はチラリと横眼だけで声の主を見た。上等なスーツを着た二十代くらいの優男風な男性だった。顔にはナンパで軽薄そうな笑み。

なんだか怪しげに見えた。道を尋ねる風にも見えない。響はそのまま、すたすたと歩みを止めずに駅へと向かう。

「あれ？ すいません。そのポニーテールのキミ」

すたすたと無視して歩く。

「キミだよ。ホットパンツを履いたポニーテールの」

すたすたと

「その黒いタンクトップに白の上着のホットパンツでポニーテールなキミ」

次々と特徴を言い当て完全に響を指しているのは明らかで、なにか周りからジロジロと見られて目立っているような気がした。響は軽く舌打ちをして、歩みを止めて振り向いた。

「はい？ なんかあたしにようつすか？」

響はもの凄く面倒くさそうに男を見た。

「ふう、やっと止まった。ちょっと話しいいかな？」

だが、特にそんな態度も気にせずには柔らかな、響にとっては軽薄そうな笑みで高身長な響よりも頭ひとつ分背の高い男は名刺いれらしき物を取り出した。

「いやです」

名刺を取り出す前に響は軽やかなターンで踵を返して再び歩き始めた。

「あれ、ちよつと、待って」

予想外な行動に男は慌てて響の進路に回り込み、名刺を突き出した。

「まあ、話だけでも聞いてもらえないかな？」

「あたし急いんだけど」

たぶんこの男はしつこい。本能的にそう感じた響は苦虫を噛み潰したような顔で嫌々ながら名刺を受け取り一応、名刺を見た。

「芸能ぶろだくしゅん、えくすとリーむ？ 敏腕すかうと」吉野 スキマツ」……なんだこれ？」

名刺に書かれていた文字を読んで、目の前の男にますます胡散臭い物を感じた。

（敏腕スカウトって、普通名刺に書くもんか？……つつかなんで芸能プロダクションがあたしに声を掛ける……てか、この名前、牛井屋かよ）
名前だけはぷつと噴き出しそんな男は柔和な笑みを崩さずに話を始める。

「唐突だけど読んで字のごとくキミをスカウト——」

「や、興味ない」

が、話は終わったと無表情で響は名刺を突き返し、再び駅へと

「だから、話を聞いて」

再び自称敏腕スカウトが回り込む、柔和な笑顔はそのまま崩さない。必死すぎて怪しさバリバリだと響は冷めた眼で男を見る。

「いや、だから興味ないって、つつかなんであたしをスカウトするんすか？」

「ん〜、魅力的な物をキミに」

「……あー、もしかしてアッチ系？ いやあたしまだ未成年だから」

「違う。絶対アッチ系じゃないから。頼むから話を」

同じ所をクルクルと回るような押し問答がしばらく続き、響は疲れた顔で男を見た。

「ほんと、しつけない」

「じゃ、話を」

響とは対照的に敏腕スカウト吉野は汗ひとつつかない涼やかな顔で目の前に立つ姿がどこか清々しいこの男の話を聞いた方が早いと響は考え直し、話を最後まで聞いてさっさと断って病院に行こうと思った。心無しか胸のアザが熱くなってる気がした。

「おじさん、あたし行かなきゃなんねえから、とつとと済ましてくれよ」

「ああ、大丈夫。そんなに時間は取らせないから、あと僕はまだギリギリ二十代だよ」

「ギリギリって、じゅうぶんおじさんだと思っけど」

さして人の年など興味ない響はどうでもよさげに吉野の眼を見た。

「ん？ どうしたの？」

吉野は柔和な笑みのまま真っ直ぐに自分の眼を見る響に首を傾げた。たがかわらず響は猫みたいな眼でじつと見る。

「人に話をするときは眼を見て話せって言わない？」

それが当たり前だと響は言った。

「ああなるほど。確かに、そのとおりだね」

言って、吉野も同じように、響の眼をじつと見た。

「んじゃ、さつさと、話を、て、あ……れ」

途端に、響は急なだるさに襲われる。身体から力が抜けてく感覚。だが、響の身体は地面には倒れ込むことは無く。訳もわからず響の視界だけがぐるりと暗転した。

「……あ」

暗転した世界から響は眼を覚ました。気だるさをまだ感じるが、頭を振って冷たい床から立ち上がる。

「なんだ、ここ？」

まったく知らない場所に響はいた。冷たく無機質な鉄の床に微かな機械音の響く遙か高くに見える天井。

目の前には大きな倉庫を思わせる扉。

「あのスカウト……」

気を失う前の吉野という男の笑みを思い出し、響はふつつと怒りが湧いてきた。

知らない場所にいるこの現状。試しに引っ張って見てもビクともしない扉。明らかに閉じ込められていた。

「おい、なんで閉じ込められてんだ！ こっから出せよ！！」

怒りと共にガンガンと扉を蹴りつけて怒鳴る。

だが、誰も反応を返して来ないし、扉もビクともしない。ただ疲れるだけだった。

「はあ、はあ、くっそ、いつたい——」

散々扉を蹴りつけ声の限りに喚き散らして、肉体に披露を感じた時だった。

「!？」

後ろの方から違和感を感じた。

「誰かが見ている」誰もいないはずなのに見られている。そんな違和感。

「なん……だ」

恐る恐ると、響自身が驚くほどゆっくりと後ろを振り返る。

後ろは真っ暗でなにも見えない。何も、無い？

「つつあ！ な、なに」

唐突に胸が熱くなる。アザが熱くなって強く光を発している。何が起こっているのか訳がわからない。だが、この強い光が暗い世界を晴らし、目の前が……見える。

「ツツ!？」

響は息を飲んだ。目の前に見えるものが理解できなかった。

それは

「か、顔？」

響は無意識にその表現を使った。そう、顔だ。巨大な顔が、なぜこんなに近くなのに気づかなかったと思える程の顔が目の前にある。

それはまるで、鬣を逆立てた獅子のように見えた。その紅い色は胸のアザと同じに見えた。

「なんか、「ロボット」みたいだ」

ロボット。その表現がしっくりきた。美術館のオブジェでもなく。遊園地のアトラクションでもない。テレビの企業CMで見えるような作業的な、パフォーマンスをするようなロボットではなく、まるでアニメや漫画にでてくるようなロボットの顔が目の前にある。

その存在感が、現実なのだと頭に響く。なにか吸い寄せられるように自然に、このロボットの前に響は歩みよっていた。

「……」

怖いなんて感情はまったく覚えず。何故か胸のアザの熱が暖かなものに感じた。

「お前は、「だれ」だ？」

口を突いて出た言葉は不可思議だった。ロボットに「だれ」と尋ねるなんて。

「だれ」の言葉に応えるように、ロボットの両眼が鈍く十字の形に光った。

「え」

まるでその光に溶け込むように、響の目の前が紅に染まる。

「……んん」

日の差し込み。太陽の光に響はゆっくりと眼を開ける。

（なんだ、夢か。さっきまでの全部）

おかしいと思った。そうだ胸にヘンテコなアザができるなんておかしいし、自分はスカウトマンに声を掛けられたりしない。それにあんな巨大なロボットの顔なんて

「ありえない」

眼を開けた先に映ったのは、自分の部屋では無かった。

街だ。響は街を見下ろしている。目の前に広がる街は、高層ビルから眺めているような光景。

「ここ、東丘地区？」

その街並みは模型のように見えたが確かに見覚えのある街。
響の生活の場所。

駅がある。毎日通う学校がある。千世とよく行くファーストフード店やゲームセンターの看板も見える。

ここは紛れもなく、響の暮らす東丘地区だった。

「んだよ、これ」

よろけるように後ろに下がると景色も後ろに下がり、響は理解した。

自分は「何か」の「中」にいると。

「なんなんだよ」

愕然として、辺りを見回す。リングだ。意識を街からずらすとリングが見えた。響は白いリングの中にいる。紅い床の上に立っている。

「わからない」

身に付けているものも違う。白い上着でも黒いタンクトップでも、デニム生地の手ツパンツでもない。もっとふわふわとしたヒラヒラとした、軽い、まるで何も着ていないかのように軽い

深紅のドレス。

例えるならまるで薔薇のようなドレス。

がさつな男言葉の中で生きてきた響でさえも綺麗だと感じる現実離れた美しさのドレス。

「わからねえよっ!？」

自分にいま何が起きているのか理解できない。頭の中がぐちゃぐちゃで、混乱して、どうにかなってしまいそうだった。

「誰か、誰か教えてよ。あたしがどうなってんのか教えてくれよ!！」

声を張り上げて喉が痛くなるほどに叫び、誰でもいいから言葉を望んだ。説明してくれる優しい言葉を望んだ。

言葉は返って来ない。

普通の彼女からは考えられない程の不安が心を埋めつくす。不安定。何もかもが不安定。冷静になるには時間が掛かる。

そんな彼女に追い討ちをかけるように、再び不思議な現象が起こった。

空が、空の一部が硝子のように粉々に、割れた。

「あ……な、で」

割れた空からそれは現れた。見慣れた街並みを消し飛ばし、大地へと降り立つ。

「異形」な存在が姿を現す。

「なんだ……なんなんだよ」

それはまるで西洋の鎧甲冑のような、しかし形作るその姿は四足。鎧を着こんだ四つ足の獣のような姿だった。頭部はなく野生動物のような角が付いているのみ。

「お……い」

不思議とその異形な姿に響は恐怖心を感じていなかった。それよりも、彼女の心を埋め尽くしたのは。

異形者が吹き飛ばした街並みだった。

あそこには人がいたかもしれない。もしかしたら知った人間がいたかもしれない。今ので、何人の人が……。

「!!!?」

前触れは無かった。ただ突然に異形者が動き出した。更に見知った街並みを吹き飛ばし、響の元へとその巨大な角を向けて突撃を仕掛

けてくる。

「やめろ」

街並みが容赦無く吹き飛び、街の姿を変えてゆく。

「やめろやめろやめろっ！！」

響は咄嗟に走り出そうとする。壊されてたまるか。ここを、千世達と過ごした想い出をこれ以上壊されてたまるか！！

走る勢いで動いたつもりだった。だが、それは酷く遅かった。まるでゆくとした歩行で、まるで自分の意思などとは通らないような。そして、気付いた。歩行する事によって自分も街を破壊している事に、その考えがよぎった瞬間。歩行は止まっていた。

そして

「ギアッッ！！」

金属のつんざくような音と鈍い激痛と激しい衝撃と共に、響は異形者に弾き飛ばされていた。

視界が回転する。自分の進路上にある全てを弾き飛ばして、視界は回転する。

「ぐっ、はあ、はあ、はあ」

回転がようやく止まる。仰向けの常態で身体はまったく動かない。

だが、動かなければならない。響は自分が寝転がる場所が解る。解ってしまっていた。

ここは校舎だ。東丘高校の校舎だ。視界には見える。見慣れた、それこそ数えきれない想い出のある。自分の学校だ。

立ち上がれ、立ち上がれと身体に力を込める。だが、身体はビクとしなくて、無情にも異形が姿を現し

「やめ!？」

容赦無くその鋭利な角で響を弾き飛ばす。

学校が、東丘高校が、自分の「身体」で破壊されてしまった。

「あ、あ……ああ」

計り知れない後悔が、響を襲う。ここにも、人がいたかもしれない。先生がいたかもしれない。部活をしていた生徒もいたかもしれない。千世の急用も、もしかしたら。

そんなことは考えたくもなかった。

「ぐっ、うつうつ」

ダメだ、これ以上はダメだ。立ち上がらないと、あのわけわからないものを倒さないで。

異形の前足が響へと降り降ろされる。

「があっつ！？」

空気の塊が口から漏れ、強烈な圧迫感が襲う。

それがどうした。立ち上がれ、これ以上やらせたらダメなんだあ
たしは立ち上がってこいつを

倒すんだ。

ガインと鈍い金属の音が響き渡る。

異形者が弾き飛ばされていた。

紅い脚が、異形者を蹴り飛ばしていた。

いとも簡単に、あれほど思い通りにはいかなかったのに、自由に
動かす事ができた。

「……」

響は頭の中が真っ白になっていた。なにか許せない者があつたはず
だ。

大地に手を突いて立ち上がる。

「ああ、こいつだ」

そうだ、このわけの解らない者を倒す。

胸が熱くなる。頭の中がこいつを倒したいという押さえきれない感情でいっぱいになる。

「なんだ……これ」

なにか右手に握っている感覚。なにかは解らないただ「剣」を持っている気がした。頭の中で文字だけが浮かんでいる。

「……「エーテリウム」……「ファイブブレイド」」

どうでもいい。とにかくあいつを倒そう。

響の身体の激痛が強くなる。だが、それと同時に身体の中が真っ赤に、燃え上がるように、熱くなる。

紅い大剣を引きずり、異形へと歩き進む。熱くて、熱くて、堪らない。

響の髪の色が紅に変化する。

倒す。倒す。倒す。

身体全体から吹き上がる熱量が大地を焦がし、溶岩のように溶け始める。

響は気付いてはいない。粉々に弾き飛ばされた街並みを燃やし、溶かしていることを。

「よくも、よくも」

まだ倒れ伏す異形の前に立ち紅い大剣を振り上げる。

力の进りが剣へと集中し、響の、いや、響の操る「巨大な鉄の騎士」の巨軀までもが溶け始めていた。

もはや制御の効いていないこの力を止める事はできない。

「消えちまえええつつ!!」

瞳が真っ赤に燃え上がる紅に変質し、剣に溜め込んだ全てを降り降ろし、叩きつける。

燃え上がる力は異形者を飲み込み、跡形も無く消滅させる。

だが、放たれた破壊の力は止まることを知らず、もろともに辺り一帯の空間を残らず消滅させた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2146w/>

エクスリッター

2011年10月9日14時43分発行